

よとて、佐良嶽山に赤旗少々指上げたり。源氏は左右なく追懸けず。押違へて陸地に懸りて、加賀國平岳野の木立林に陣を取つて、白旗を挙げたりけり。源平兩陣に白旗・赤旗立ちたれども、霞を阻て遙なり。五月廿五日の事也。源平互に馬の草飼ひ、兵糧づかひなどして有りける程に、源氏の草刈をば平家搦捕へ、平家の草刈をば源氏搦捕へ、互に軍の僉議を問ひけり。源氏の草刈平家を威して申しけるは、あの東に見候森を木立林と申して、中に一つの板堂あり。彼を壊りてならば平足駄と云ふ物に造りて、續松を拵へて、直路に懸りて押寄せて、夜討にせんとこそひしめき侍りつれ云々。平家此の事を聞きて騒ぎあへり。三位中將仰せけるは、成合の手にかゝりて、安宅渡の橋を引いて、閑に源氏を待つべかりつるものと宣へば、待共心弱く思ひて、我先々々と藤塚・今湊・安宅を指してぞ落行きける。とあり。さて義仲は平岡野より陸路通り平家を逐うて、安宅へ押寄せけり。其の道路をば今に至り木曾街道と呼べり。右平岡野と宮腰との對陣せし事、平家物語には記尋せず。また南北兩朝争戰の頃にも此の平岡野にて合戰あり。

り。汲古北微録に載せたる應安二年十二月の文書に見ゆ。得田加賀介章房申軍忠狀

一、北國爲御退治御下向之處。桃井中務少輔已下凶徒加州平岡野陣取。依及富樫城難儀。同八月十五日御發向之間。屬于吉見左馬助殿御手。於野々市日夜々致合戰畢。

一、同九月八日押寄平岡野陣致合戰。中務少輔已下凶徒等追落畢。

一、同十七日御敵引退越中國一乘之城間。御發向即追落畢。(自餘略之。)

此等次第大將御見知之上者。下賜御證判。爲備龜鏡。恐々言上如件。

應安二年十二月日

承了判

得江八郎次郎季員申軍忠事

今年四月廿八日以來至于六月一日。於能登部城屬于吉見伊豫入道殿御手。日夜抽戰功畢。

一、御下向之間。自越前國金津加州御越之時御共仕。屬于吉見左馬助殿御手。向平岡野致連日合戰忠畢。

一、同九月七日御敵攻寄宮腰之間。同九日當所御發向之時御共仕處。凶徒即引退大野宿畢。同十二日夜御敵令沒落大野宿。取陣宇多須山之間。同十五日被責落彼城云々。是等次第賜御證判。爲備向後龜鏡。恐々言上。如件。

應安二年十二月日

承了判

右兩通共吉見參河守氏頼の證判也。

按ずるに、應安は北朝の年號也。その二年は後村上天皇正平廿三年に當れり。壽永二年源平の合戰より正平廿三年は、百八十八年後なり。されば廣岡の地邊は右兩度の古戰場なりし事知るべし。津田鳳卿の梧桐文稿に、吾聞之。木村貞亨曰。嘗從其主生駒氏。漁獵粟崎。侵夜立彌川水上。眺望安江。西念。至木越曠野。屢現鬼燐火。及曉飛行尤多云。是古戰場也。小松人亦云。篠原多鬼火。與我所見符。鬼燐火此云狐火。とあり。右安江。西念邊にいにしへ平岡野の地域にて、壽永以來の古戰場也。俱利加羅峠なる地獄谷など呼びたる古戦場の地邊は、今に至り夜中小雨の頃など陰火おびたゞしきよし、柴野美啓いへり。

○廣岡村

郷庄分村名帳に、石川郡戸板郷南廣岡村・北廣岡村・長田村などありて、此の地邊をば惣名廣岡と呼べり。金澤事蹟必録に、或説に、平岡野の居民共、豊田の郷内に田地を開墾し、其地へ家を移し、村落を立つ。今の廣岡村是也。といへり。豊田郷は今戸板郷とす。右北廣岡の村落は、山王道の傍に村家を建てたり。南廣岡の村落は、古道の方に村家ありしかど、村地追々町地と成り、残る田畠は長田・二口村などへ買入れ、南廣岡の村民とて一家残り居りしかど、是も他所へ移轉し、村落全く絶え、今は北廣岡村のみと成りたりといへり。

○廣岡三郎利成傳

尊卑分脉大系圖に、林六郎光明の弟豊田五郎光成の次男弘岡三郎利成、其の子弘岡小三郎利光とあり。また、蔭涼軒季瓊日録寛正六年八月の條に、廣岡九郎といふ人見たり。是も三郎利成の子孫なるべし。按ずるに、林六郎光明は、木曾義仲の時源氏の味方をなし、平家を追討せし由、源平盛衰記・平家物語に見え、豊田五郎光成は、白山宮莊嚴講